

枕草子註釈の疑義について

——馬典侍・宰相の君・中納言の君の場合——

山内 益次郎

(一) 馬典侍か馬内侍か

枕草子一〇八段「淑景舎春宮にまいり給ふほとのこと」(註1)につぎの文がある。

宮のほらせ給ふへき御使にてむまの内侍のすけま
いり給へり

底本は能因本系統で、前田本は同文、三卷本は最後が「まいりたり」となっているが「むまの内侍のすけ」は各系統異文がない。この「馬典侍」については枕草紙抄(註2)が

作者部類云馬内侍大和守馬権頭時明女一条院皇后
宮女房

と註をつけたのに始まり、北村季吟の春曙抄も岡西惟

仲の枕草紙旁註も大体同じような註解をしている。明治以後の註釈もほとんど「馬典侍」について「馬内侍時明女」とするものが多い。(註3)

これらの説は、馬典侍を馬内侍の誤記と認めて註を施したのであろうか、それとも馬内侍が枕草子の書かれた年時には、すでに典侍に昇任していた事実に基づいているのであろうか。誤記であると割り切って考えれば、いちばん簡単であるが、各系統の諸本がすべて馬典侍に一致していることでもあるし、理由なく本文を変改して解釈するのは大胆すぎるようである。馬内侍が馬典侍に昇任したか否かについては、当時の類例についてもう少し考えてみる必要がある。

典侍は、尚侍が天皇又は東宮妃となった当時においては、事実上女官最高の官職であった。順徳院の禁秘抄には

此職尤重。為御乳母之人者。諸大夫女聴之。只人

公卿侍臣女也。侍臣女生公達体也。大臣子頗無例。大臣孫少々有例。

とあり、まず父祖が公卿又はそれに准ずる殿上人であることが第一の要件であった。一条朝の典侍の例を拾ってみると、

橘典侍橘清子 父大納言好古

藤三位藤原繁子 父右大臣師輔

宰相の君藤原豊子 父大納言道綱

少将典侍 父参議源扶義

前典侍 父参議源経頼

橘三位徳子 父播磨守仲遠 一条天皇乳母

この外橘慶子、藤原灌子、藤原高子、藤原芳子、高階微子等の名が典侍として諸書に散見するが、父祖の氏名、官職等は正確に定められない。父がわかっている

のは、最後の橘徳子を除きすべて参議以上である。公卿でない家柄の出身である徳子が典侍に昇進したのは禁秘抄にもあるように、一条天皇の乳母であったためである。枕草子一八四段「くらゐこそ」の章段に

内わたりに御めのとは内侍のすけ三位などになりぬれは、をもをもし

とあるのもこの事情を述べたものである。なお、平安鎌倉期の典侍で父祖が明らかなもの四十四例（多分に任意抽出的であるが）を検討した結果、三十八例は父（又は祖父）が参議又は三位以上であり、四例は父が上達部でないが本人が天皇の乳母であった者、残り二例の中、中務内侍は三条天皇中宮研子の乳母であり、平棟子は後嵯峨天皇妃であった。

内侍として仕えていたものが典侍に昇進した例は珍しくない。その中から父がわかっている例を一、二挙げると、藤原因香は父高藤が参議から中納言になった寛平九年（八九七）に掌侍に昇進、年時不明だが後年典侍になった。父高藤は極官内大臣であるが、因香の

昇進と父の官位昇進は無縁ではなからうと思われる。鎌倉時代に入るが、平棟子ははじめ四条天皇の宮廷に仕えていたが、そのうち掌侍となって兵衛内侍と称した。ついで邦仁親王（のちの後嵯峨天皇）の妃となり、親王が帝位につかれると、寛元三年（一二四五）典侍となった。その後三位に叙せられ、宰相三位と称せられ、生子宗尊親王が征夷大將軍に任じられると、大納言二位局と呼ばれ、後には従一位まで進み三宮に准じられた。棟子の父棟基は木工頭、祖父棟範も右大弁止まりで、何れも公卿にはならなかった。兄成俊は権中納言まで昇ったが、参議になったのが、棟子が典侍になってから十七年後である。（註4）棟子の典侍昇進は父祖の官位よりも、天皇妃によるものと思われる。このように内侍から典侍に昇進する場合、父の官位だとか稀有の例であるが天皇妃のような地位を得るような特別の条件が必要であって、単に年功や職務上の成績だけでは仲々昇進できなかったようである。

さて、馬内侍の場合であるが、父源時明（桜井秀博

士、鈴木一男氏等は養父説、）（註5）は文徳源氏で右馬権頭、讃岐守等を歴任したが公卿にはなっていない。祖父仲舒も従四位下で但馬、出羽守止まりである。内侍本人が帝や後の乳母となった記録も見当らず、まして帝や東宮妃にもならなかったようである。したがって、馬内侍が典侍に昇進する条件は充されなかったと思われる。日本大学創立七十年記念論文集第一巻の「大斎院前御集の研究」に、馬内侍関係の資料目録がある。この中には中古、中世の馬内侍の歌や名前の出ている文献が示されているが、この目録と勅撰作者部類（註6）とを合わせ集計してみると、馬内侍関係の歌又は記述は、勅撰和歌集が拾遺集を始めとして十四集、その他私撰集、私家集、歌論書、歌説話、歌合等の中に数十個所見出される。その中に出てくる作者名は大部分「馬内侍」であり、外に「内侍馬」「中宮内侍馬」「馬こそ」等があるが、「馬典侍」は見られない。もし昇任していたとすれば、後年のものや、没後の諸歌集等には、「馬典侍」の名があるはずである。

典侍昇格の資格がなく、他に馬典侍の記録も残っていないとすれば、時明女馬内侍が馬典侍と同一人であると断定するのは無理であろう。

要するに、今まで多くの註では「馬典侍」を「馬内侍」として説明しているが、馬内侍が馬典侍に昇進した確証は見出せない。枕草子の著者又は伝承者が馬内侍と書くべきところを馬典侍と誤記したのか、それとも馬内侍とは別人の馬典侍が居たのか今にわかに決定できないようである。

(二) 宰相の君は重輔女か

枕草子二五六段「関白殿二月十日のほとに」の章段に

宰相の君とはとみの小路の左大臣殿の御孫云々とある。この部分は、三卷本系統および前田本では「とみの小路の右のおとどの御孫」となっている。富小路の大臣は藤原時平の子顕忠を指すと思われるので、日本紀略、尊卑分脈、公卿補任、大鏡等一致して右大臣止まりとある以上、底本の能因本の本文が誤り

であろう。

宰相の君という女房は、枕草子では七章段に亘って登場するが、一〇八段「淑景舎春宮にまいり給ふほと」の事などに出てくる宰相の君は、淑景舎づきの女房、北野の三位藤原遠度の娘であって、他の六段の顕忠孫娘とは別人である。

従来、顕忠孫の宰相の君の解説では、ほとんどすべての註釈書が、顕忠の子である重輔の娘であると説明している。(註7)ところが尊卑分脈には重輔に女子は無く、その他中世以前に作られた系図類、歌書、史籍等にもまだ重輔女の記述があるのを見ない。現存する古註の中で、もっとも早く宰相の君の家系を説明したのは、(一)でもとりあげた枕草紙抄である。

現存の尊卑分脈と較べてみると、重輔の男子四人の名は同じであるが、重輔女子はなく、まして「宰相、中宮女房」にあたる者も見当らない。又顕忠の註記についてみると、枕草紙抄と当時の記録類とにちがう個所がある。

同^ク云^ク（前項の「藤氏家譜云」をうける。）

時平—顯忠（註別掲）

元輔五藏頭參
木正四下
重輔從四下左衛門佐
右馬頭藏人
致貞從五上
因播守
致重從五上
内藏助
心譽權僧正
快公大僧都
女子宰相中
宮女房

枕草紙抄

他の記録

○検別

檢非違使別当（補任・分脈）

×從一

薨時從二位（補任・分脈・紀略）

×左大將

左右大將（補任・分脈）

×大大臣（太政大臣の意か）

右大臣（補任・分脈・大鏡）

○号富小路

富小路を号す（補任・分脈・大鏡）

○康保二年四月廿四日薨

同上（補任・分脈・紀略）

×（薨年）六十

薨年六十八（補任・分脈・紀略）

×贈正二位

贈正二位（補任・分脈）

このように、枕草紙抄に引用された系図は他の文書記

録類と相当異なっていることに気がつく。公卿補任、

尊卑分脈、日本紀略等の中にも史実と異なっている記述はあるとしてもそれらの数書が一致して、枕草紙抄とちがっている場合、抄の史実性の方を疑うべきであろう。草枕子抄に引かれた藤氏家譜又は藤氏譜、藤原家等譜と呼ばれる系図類を尊卑分脈と比較してみると、大綱的には似ていて、ほとんど同じ人名や註記が見られる場合が多いが、部分的に異なった個所が目につく。顯忠の註記の場合、八個所中五個所も内容が異なっているが、こういう例は珍しい。枕草紙抄に引用された系図の原拠である藤氏家譜が現在散佚して伝わらないのか、著者、翻刻者の転写の際の誤記であるのか、あるいは意恣による変更であるのか現在では定められないが、延宝二年五月刊行の板本ではすでに以上のようなちがいが見られる。

枕草紙抄の刊行後数年あるいは数十年にして出版されたと思われる北村季吟（一六二四—一七〇五）の枕草子春曙抄でも二〇段「清凉殿のうしとらの」および

二五六段「関白殿二月十日のほとに法興院の」では

顯忠公の次男、左衛門ノ佐重輔のむすめ宰相の君也

と註しているが、その原拠は示してない。岡西惟中の枕草紙旁註（天和元年一六八一刊）でも前記二〇段、二五六段に重輔女と註があるが原拠不明である。江戸初期に書かれた古註三書が全く同じ内容を持つのは、同一原拠を用いたのか、他の二書がもっとも早い枕草紙抄を踏襲したのかわからないが、少なくとも現在では相当信憑性があると思われる日本紀略、尊卑分脈等と異なっているのである。

近代の註釈では、明治四十四年発行の武藤元信著枕草子通釈に、枕草紙抄を引いて重輔女とし、昭和六年に出た関根正直著枕草子集註、昭和三十年発行の塩田良平博士の枕草子評釈の二書では春曙抄を引用して重輔女と説明されている。その他多くの註釈書には原拠を示されたものを見ないが、いずれにしても枕草紙抄の藤氏家譜よりも古くさかのぼって、重輔女の記録を

見出すことができない。その藤氏家譜が、前述のように史実（と現在の時点では思われるもの）と異なる内容をもっているとすれば、「重輔女」が宰相の君であるという事実も、全面的には信用できない。したがって、今の段階では、顯忠の孫娘は、長男藤原元輔の娘か、三男重輔の娘であるのかその外の孫であるのか不明であるという外はない。

（備考）

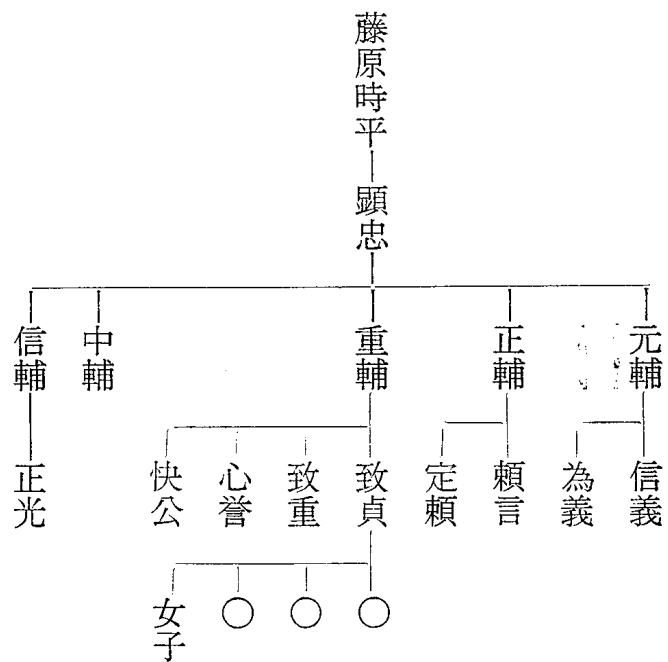
尊卑分脈では顯忠の子孫はつぎのようになっている。

系図A（註8）

この系図でに顯忠孫が九人挙げられているが女子の名はない。顯忠の曾孫すなわち重輔孫には女子があり、その註記は

小一条皇后宮女房 号山田中務 後拾遺作者

とある。顯忠孫とあるが、「孫」がその子孫の意味に使われる場合も皆無ではないとしてもこの場合は



どうであろうか。又、「小一条皇后宮」が小一条院女御（道長女子の寛子等）の誤記なのか一条天皇皇后（枕草子に多く登場する清少納言の仕えた定子皇后）の誤記であるのか不明である。また「宰相」と「山田中務」では称呼が全くちがっている。藤原重輔の生没年は記録がないが、兄元輔が九一六年生であるから、かりに重輔を九二〇—九四〇年生とす

れば、その孫娘は定子皇后在世の九九五年には一五歳——三五歳ぐらいで、出仕したとしても年齢的には無理はない。しかし山田中務を抄の著者が宰相の君とまちがえたか否かについては判定の資料がない。

顯忠の長男藤原元輔は公卿補佐によれば天禄三年（九七二）五七歳で参議となり、天延三年（九七五）参議の現職のまま薨じた。尊卑分脈にはないが、彼には娘があったという記録がある。清原元輔の家に

宰相もとすけの朝臣の娘のもき侍しに

結ひあへる君か玉ものひかりにはさやけき月のかけそそふ覧

裳着の儀式はふつう十二歳から十四歳ごろであったから、藤原元輔が宰相であった九七二——九七五年に十三歳とすれば、枕草子に登場している長徳元年（九九五）には三二——三五歳となる。この女性が枕草子以外に顯忠孫として当時の記録に止められた

唯一の女性で、同時に父が宰相であったという点では「宰相の君」の名にふさわしい。しかし、藤元輔女子が宰相の君であると決定する原拠としては不十分である。

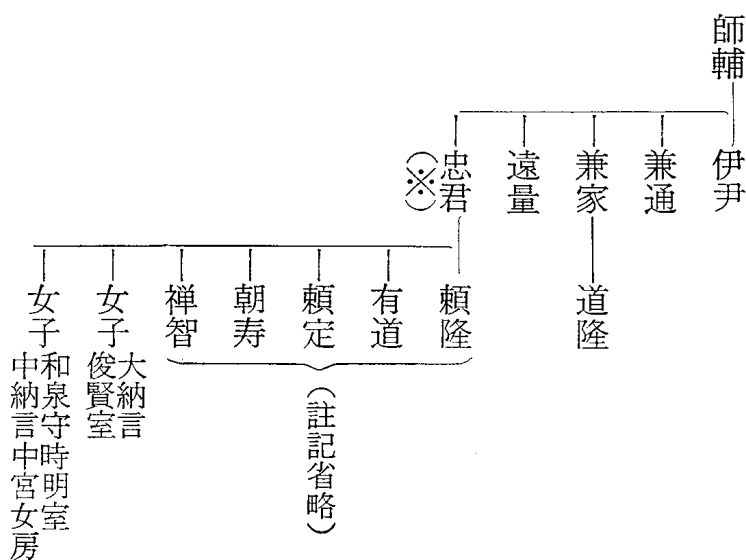
(三) 中納言の君は藤原時明室か

枕草子二五六段「関白殿二月十日のほとに法興院の」の文中に

中納言の君といふはとの御をちの右兵衛督たたきみと聞えけるか御むすめ

とある。諸本により少異があるが、「中納言の君」と「との御をちの右兵衛督」の個所は各系統大部分同文である。中納言の君はこのほか、一〇〇段「ねたきもの」(註9) 一三二段「関白殿のくるとより」二二七段「十月十余日の月いとあかきに」等の諸段に登場しているが、これらの女房名は、等しく「忠君女」を指すものと思われる。この「中納言の君」についてもやはり前記(一)(二)と同じく枕草紙抄にくわしい。

藤氏家譜云(系図B)



※貞信公為子正四上右兵衛督五藏人
安和元卒母同兼家

尊卑分脈には忠君女子の系図が二個所に見られる。その一つ系図C(註10)では

忠平—忠君—女子

とあり、忠君の註記は「実者九条殿男 正四上右兵衛

督」その女子には「和泉守時明室 右中弁頼任母」となっている。他の一つ系図D（註11）では

忠平―師輔―忠君―女子

とあり、忠君の註記は「為貞信公子正四下右兵衛督母同兼家公安和元年卒」女子は「大納言俊賢卿室 顕基隆国等母」となっている。系図Cの註記にある九条殿は藤原師輔、系図Dの註記にある貞信公は藤原忠平であって、この両系図によって忠君は本来師輔の子であるが、祖父忠平の養子となっていたことがわかる。両系図ともに忠君の男子数人があり、氏名は同一である。ところが忠君女子はCとDとで註記が異なり、系図Cでは藤原時明室、系図Dでは源俊賢室となっている。

一方、尊卑分脈の藤原魚名の子孫の系図（註12）には藤原時明の子頼任の註記として、「従四上丹波美乃守右中弁左衛門佐 母右兵衛督忠君女」とあり、醍醐源氏の系図（註13）には源俊賢の子顕基の註記に「母右兵衛督忠君女（イ本忠君女）」がある。公卿補任の源顕基

の項にも「母故右兵衛督藤忠君女」とあり、弟の隆国の項には「母与顕基卿同」とある。これらの記録は系図C、系図Dの事実を裏書きするものである。

このCD両系図だけでは忠君女子が二人居たのか、同一人が二度結婚したのか何れとも決定できない。ところが枕草紙抄にある系図Bは尊卑分脈にある二つの系図CDをつき合わせて、忠君女子を二人とし、その上更に時明室にはCDには全くない「中納言、中宮女房」の註記が加えられている。忠君女で時明の妻になった女性が中納言と呼ばれ、中宮女房であったという記録の原拠は枕草紙抄の「藤氏家譜」だけで、その後

の註釈書にも抄以外の原拠は全く示されていない。（註14）前に（二）で述べたように枕草紙抄の系図には他の記録にない、史実と異なっていると思われる内容も往々にして散見する。従って、より古い信憑性のある原拠がない場合、系図Bのような後世の資料をよりどころにして、忠君女時明室を定子女房「中納言の君」と断定するのは危険である。忠君女子藤原時明室が中納

言の君の有力な候補として挙げられるが、源俊賢室も不適格とはいい難く、あるいは他にも姉妹が居たかもしれないのである。

(備考)

藤原忠君卒

九六八年(分脈)

藤時明男頼任生誕

九八五頃(御堂)

源俊賢長男顯基生誕

一〇〇〇(補任)

同 二男隆国生誕 一〇〇四(補任)

右の頼任生誕は御堂関白日記の寛弘二年一月九日の記事にある頼任が蔵人に補せられた年齢を二十歳と仮定して逆算したものである。俊賢室(忠君女子)の生年の上限は隆国を生んだ年齢を四〇歳として九六五年、下限は父忠君の歿年九六八年である。従って時明室と俊賢室が同一人だとすれば、時明男頼任を生んだのが二〇歳前後で、その後再婚して十数年後に俊賢の二人の男子を生んだことになる。

枕草紙抄の系図にあるように二人が姉妹であったとすれば、妹の時明室の方が十数年早く男子を生ん

だことになる。

旧勅撰部類「左衛門督北方」には「大納言俊賢卿室、宇治関白頼通公女」とあり、和歌文学大辞典では「源顯基、隆国の母。師輔の男右兵衛督忠尹の女か。」と述べてある。公卿補任等には俊賢の官歴に左衛門督はなく、又頼通女云々については未考である。左衛門督北方と俊賢室と隆国母の三者を結びつける原拠については所見がなく、ましてこれを定子女房の中納言の君であると決定するだけの根拠も見出せない。

(附)枕草紙抄の女房註釈について

前述の女房以外に枕草紙抄に示されている女房の註釈を摘記して妥当性を検討してみたい。

(イ)「右近」第七段外

枕草紙抄(以下抄と略記する)では作者部類等を用い藤原季綱女又は同季繩女と註している。この右近は承平元年(九三一)ごろ藤師輔と歌を贈答しているが、この年を二〇歳としても枕草子に登場する長徳二

年（九九六）には八五歳となつて事実と合わない。

(d) 「小左近」第二五六段

抄——「作者部類ニ云ク散位中原ノ経相ノ女三条院ノ女房三条ノ小左近 後撰の作者也」三条ノ小左近は後拾遺集、続詞花集に歌が出ていて、時代的には矛盾しないが、枕草子に登場する女房小左近と同一人であるという積極的理由に乏しい。

(h) 「小兵衛」第九一段 第一四一段

抄——「作者部類云 兵衛内侍後撰一新千載一云々 系図未考」

後撰作者には藤原兼茂女「兵衛」があり、源隆俊女の「兵衛内侍」は一条天皇時代に生存し、後拾遺集、新千載集に各一首を残している。この二人のどちらかを指すと思われるが両者とも定子皇后女房であるという積極的な資料はない。

(i) 「北野の三位の女宰相の君」（能因本）

「北野の宰相の女宰相の君」（三卷本） 第一〇八段

抄——三卷本系統の本文をとつて北野宰相女と解

し、菅原氏の系図を引用して菅原輔正の女としている。抄以来近代になつてからも輔正女の註が多かったが、金子元臣氏の枕草子評釈で藤原遠度女とされ、その後は遠度説が多い。しかし比較的新しい塩田博士の枕草子評釈は輔正女説をとり、岸上慎二博士の校訂三卷本枕草子では遠度女又は輔正女と両者並記されている。北野の三位女というのは紫式部日記にも登場し、この場合は遠度女が定説となっている。尊卑分脈、公卿補任では遠度を北野三位、輔正を北野宰相と書いているが、枕草子の場合、異本の本文のどちらを正当とするかによって解釈も異なると思われる。

(k) 「御めのとの大輔」第九九段

抄——「一品宮の御乳母名也 周家の君のつまなり」

春曙抄で「后宮の御乳母なるべし」と註して以来諸註定子皇后の乳母と解している。周家は中宮定子の兄弟で、尊卑分脈に二子があるが、周家妻の家系等は書いていない。抄が何を原拠としたか不明で、この説に賛

同したものをまだ見ない。

(ハ) 「藤三位」第一四一段

抄が大鏡を引用して一条天皇の乳母で藤原道兼の室と註して以来、春曙抄を始め諸註これと同じである。

(ロ) 「兵部」第二七一段

抄では、藤原良門の孫兼茂の女子兵衛を挙げて「かねすけ女」の誤記であろうかと疑っている。此の註は「兼茂」「兵衛」ともに本文と異なり、家系の説明として妥当でない。

(チ) 「小若君」

抄——「小若君は松君なり」

この説はそのまま近代に至るまで是認されていたが、関根正直博士が枕草子集註で後撰集作者に同名の女房が居ることを挙げて女房と考証された。近来女房説が多いが、最近大橋清秀氏は藤原道雅の幼名松君を指すと主張して居られる。(註15)

以上の外枕草子に登場する女房には「右衛門」「右京の君」「馬の命婦」「源少納言」「左京」「式部の

おもと」「少納言の命婦」「豊前」「弁のおもと」等があるが、枕草紙抄でも家系考証が為されていない。抄以後もまだ明確に註釈されたものを見ない。

枕草紙抄には著者名が明記されていないが今日では加藤盤齋の著と考えられている。盤齋は春曙抄の著者北村季吟と共に松永貞徳に師事し、その以前は細川幽斎に学んだ。幽斎や貞徳の註が今日に伝わらないのでどのように師説を祖述したかわからないが、最近紹介された山鹿素行が写したといわれる古註枕草子(註16)等と比べてみても、精細で創見が多いように思われる。抄には約五〇種の系図が引かれて、登場人物の家系が考証されているが、系図の引用の仕方やその原拠に疑問とすべき点もあり、春曙抄のきわめて慎重な態度と対照的である。

註1 田中重太郎博士 校本枕冊子による。以下断り書きのない場合は章段、本文は此の書による。

註2 加藤盤齋の著書と言われ、枕草子の語句文章就中人物の考証においては現存古註釈書の中では最も古く、又

詳しい。内閣文庫所蔵の木版本には延宝二年(一六七四)五月の刊記があり、現存本としては最も古いものの一である。系図・註記等この内閣文庫蔵本により確かめた。

註3 岸上慎二博士の校訂三卷本枕草子ではこれらの古註をかかげた後で、「疑問あり」と述べられ、岡一男博士の枕草子精解には時明女のような特定の人物が挙げられていない。

尚、古註の「大和守時明」は藤原時明と混同したもので、馬内侍の父源時明は大和守を歴任していない。このことはすでに明治以来の註において訂正されている。

註4 大日本史 卷七十八

註5 解釈と鑑賞 昭和三五年八月

註6 和歌文学大辞典

註7 松平静著枕草子詳解、吉沢義則博士の校註枕草子には重輔女の註がなく、父の名を示していない。

註8 改訂増補 国史大系 尊卑分脈一―四六ページ

以下の系図中人物の註記は大部分省略し、必要なものを適宜引用した。

註9 能因本「新中納言」前田本「新少納言の君」

註10 改訂増補国史大系尊卑分脈一―五〇ページ

註11 同 一―五六ページ

註12 同 二―三五九ページ

註13 同 三―四七〇ページ

註14 枕草紙抄以来大半の註釈は「中納言の君」を藤原時明室としているが、北村季吟の春曙抄をはじめ、明治以後では吉沢義則博士の校註枕草子、岡一男博士の枕草子精講、日本古典文学大系の枕草子、岸上慎二博士の校訂三卷本枕草子等には「時明室」のように積極的な人名を挙げていない。

註15 解釈と鑑賞 昭和三九年一月

註16 平安文学研究 昭和四三年六月

今井源衛氏によれば、現存する枕草子註釈書中ではもつとも古く、中世の成立であるという。